〈我〉もまた、アルカディアにあり……

矢橋　透
岐阜大学助教授

私は1975年に比較文化学類の2期生（大学全体の3期生）として筑波大学に入学し、1979年に大学院博士課程文芸・言語研究科に進学、1986年に岐阜大学に奉職するまでの7年間院に在籍した。まさに草創期の11年間にわたり、筑波にいたことになる。そして昨2004年に、博士号取得のためほぼ15年ぶりに筑波を再訪する機会を持った。わずかな滞在だったが、キャンパスが私のいたころより周囲の自然と溶けあって、第一学群まえの池の眺めなどプッサンやクロード・ロランが描くアルカディア的風景を思わせるほどだったこと、また松見公園周辺の飲み屋街が、私のいたバブル全盛期にはリトル・バンコク的様相を呈していたのに対し、すっかりリトル・ソウルに様変わりしていたことが――都市景観的には――印象に残った。帰って少しして、『筑波フォーラム』の編集委員で、湘南高校の文芸部の後輩でもある後藤嘉宏氏から原稿の依頼を受けた私は、再訪で生じたノスタルジックな気分も手伝ってか、ドクター論文として提出したふたつの著作と筑波の知的環境の関連について書こうなどと口走っていた。締め切りを目前とした今となってそのことに後悔しないでもないが、筑波での11年間はまさに研究者としての自己形成期にあたっていて、私のその後の研究活動に決定的な影響を与えたことも確かな事実であり、ここでは前述のテーマで思いつくままに小文を書き連ねてみたい。

まず私のふたつの著書とは、1996年に水声社から刊行した『劇場としての世界――フランス古典主義演劇再考』と、2003年に同じ出版社から出した『仮想現実メディアとしての演劇――フランス古典主義芸術における〈演戯〉と〈視覚〉』である。そこでは、モリエールらのフランス古典主義演劇の作品を、懐疑主義的危機など中世から近

代への知の組換えの状況のなかで――ひとつの社会的機能を担ったメディアとして――捉えなおそうとする試みが行われており、思想史・文化史・美術史など他の学問分野からの知見を大幅に取りいれ、時代に共通する知的プロブレマティックを浮かび上がらせようとしたことが、従来の領域に自足する「文学研究」と比べて大きな特徴になっている。そして、こうした領域横断的な研究スタイルが、同時代のポストモダン批評の在り様とともに（当時――むかしむかし――日本では、ジャーナリズムによってニュー・アカデミズムと名づけられた、フーコーやドゥルーズらのフランス思想で理論武装した小生意気な若造たちが、まさに領域の垣根を取り払った批評活動を行い始めていた）、筑波の講座の枠を取り払った融合型の教育・研究組織によって形成されたことは、疑いない。自由なカリキュラムのもと、我々は人文や社会学類はもとより、芸専の授業にもよく出没した（私などは、新しい中央図書館よりは体芸図書館の方がなんとなく落ち着けたものだ）。また、とくに開学当初は遊興空間が乏しかったせいもあって、当時（現在もそうだろうが）綺羅星のごとく各分野におられた偉い先生方の家に本当に気軽に――今考えると冷や汗が出るが――遊びに行き、いろいろと尖端的な研究動向などについて伺うことができた（先生と学生がコンパなどで多数集まる機会も多かった。今唐突に思い出したのは、馬渕杯という碩学の国語学者の名を冠した文芸・言語研究科のソフトボール大会で、試合が終わると、著名な教授陣――私の記憶では北原前学長も同席されていたように思うのだが――が、院生や事務の方といっしょに寿司屋に行って歓談していた）。友人に関しても、そもそも専攻の人数が少ないので、いろいろな専門のものが集まって夜遅くまでなにやかやと騒いでいた。繰り返すが、こうしたハイブリッドな言説の飛び交う空間と、私の研究スタイル（というか、フランス古典主義演劇に関する注にカサヴェテスやヌーヴェル・ヴァーグの映画への言及が顔を出すような、たぶん謹厳な文学研究者の顰蹙を買っているであろう私の著作の言説空間）が無関係だとは、思えないのである。

さて、筑波の知的環境が拙著に刻んでいると思われる今ひとつの痕跡は、題名に「仮想現実」とか「劇場」といった、仮構的なイメージが使用されていることである（それらは言うまでもなく、17世紀の西欧文化が中世から近代への転形期にあって、仮構的＝流動的になっていた状態を名指すために――「仮想現実」の場合はアナクロニック〔ディディ＝ユベルマン的な「想起」的

意味で〕に――召還されたものであるが)。もちろんこうした仮構的世界観は、ポストモダン思想(そして、ある意味でそのいびつな発展形とも言えるオタク文化)の常套的イメージでもあり、なにも筑波の環境に固有のことではない。だが筑波が、田園のなかに唐突に立ち上げられ、開学当初「陸の孤島」と言われていたその地理的閉鎖性、また調和的アルカディア的なキャンパスと、その周囲に広がる猥雑でカオス的シミュラークル的な飲食街など商業施設の二極分離――それは筑波の都市景観の重要な特徴である――において、日本のなかでもとくにそうした仮構的イメージを強く喚起する空間であったことも事実であろう。さらに知的環境面でも、筑波大の文系研究組織は日本におけるポストモダン批評の代表的な生産地のひとつであったわけだし(ちなみに私の所属していた花輪研究室もそのなかの一工場だった)、磯崎新の筑波センタービルはポストモダン建築の象徴として、一時もてはやされたということもある。そして、そうしたポストモダン的オタク的な仮想現実的世界観は、オウム真理教幹部を生み出した闇にも通じていることを忘れるべきではない。斎藤環や大塚英志といった、私と同世代の筑波大出身者がオタクの精神に強い関心を寄せ続けているのも、そのことと無関係ではないだろう。よって私は最後に、小文の表題を今一度つぶやく――「〈我〉もまた、アルカディアにあり……」と。ここでの〈我〉とは、もちろんかつて筑波というアルカディア的空間にいた筆者である私を指すが、同時にそれは「闇(死)」のことでもあるのである(注)。

追記　私は今秋の筑波新線の開通に、個人的にひじょうな興味を抱いている。筑波というポストモダン都市と、オタクの聖地にして「萌える趣都アキハバラ」(森川嘉一郎)、そして荷風の遊興的仮想現実都市浅草が結ばれるのは、なんとも刺激的なことに思われるのだ。

注) 表題に使われた原ラテン語Et in Arcadia ego は、最初は「私、死もアルカディアにいる」というメメント・モリ的な意味だったのだが、近世以降「〔今は死んでいる〕私も、かつてはアルカディアにいた」という哀悼的意味に誤読されていった。この意味の変容は、西欧文化の精神史的変遷を印すきわめて重要な意義を有している。興味のある方は、以下の拙訳を参照いただければ幸甚である。ルイ・マラン、『崇高なるプッサン』、みすず書房、2000年、第1部第3章「パノフスキーとプッサン――アルカディアにて」。この小文の題名も、そうした意味の揺らぎを反復している。

(やばせ　とおる／フランス文学・表象文化史)

ニコラ・プッサン『アルカディアの牧人たち』(パリ、ルーヴル美術館)
中央の墓にEt in Arcadia egoの文字が記されている